部活動への適応感を規定する 部の連帯性と顧問教師の管理行動との関係

吉村 斉¹

(1 高知学園短期大学)

キーワード: 部活動、連帯性、顧問教師

The Relationships between Solidarity of Clubs and Managers' Managerial Behaviors regulating Members' Adjustment to Club Activities

Hitoshi YOSHIMURA¹

(1 Kochi Gakuen College)

Key Words: club activity, solidarity, athletic club manager

目 的

部活動における積極性や満足感（以下、適応感）は、部員同士の人間関係のあり方に規定されることが示唆されてきた（吉村, 2005 など）。また、吉村（2016・2017）では部員だけでなく顧問教師による規律指導や育成指導のあり方も重要であることが示唆された。部員同士の検討では、いずれも部の連帯性につながる関係性の重要性が推察されている。そこで、本研究では中学運動部員を対象に、部活動への適応感が部の連帯性と顧問教師の規律指導と育成指導による管理行動スタイルとのあり方に依拠してどのように異なるのかを検討する。

方 法

調査対象者 運動部員については4つの中学校の運動部員2年生510名（主将を除く）を、顧問教師については510名の運動部員が所属する学校の運動部顧問教師65名を対象とした。その上で、育成指導に関する回答が得られた教師が顧問をしている部に所属する運動部員448名（男子265名、女子183名）を分析の対象とした。なお、本データは吉村（2016・2017）等で検討したデータの一部を再分析するものである。

調査の内容 本研究では調査校の承諾を得て以下の調査を行った。回答は6件法であった。

1 運動部員への調査 吉村（2017）で用いた連帯性に関する尺度、適応感に関する部活動への積極的行動、部の雰囲気への満足感、部への所属感の各下位尺度を使用した。

2 顧問教師への調査 藤田・松原（1992）で作成された規律指導と部員育成に関する項目を用いた。

調査の実施 調査は、部員に対しては学級担任より、顧問教師に対しては学校長より調査票を配付し回答してもらった。

結 果

部の連帯性の群化 各部員の部の連帯性尺度得点が全体の平均値($M=4.04$, $SD=1.02$)より高い場合を連帯性H群($N=229$)、低い場合を連帯性L群($N=219$)とした。

顧問教師の管理行動スタイルに基づいた運動部員の群化 まず、顧問教師による規律行動と部員育成に関する指導の各尺度得点について、全体の平均値（規律指導： $M=4.71$, $SD=0.90$ ；部員育成： $M=4.34$, $SD=0.78$ ）に応じて4群化した。各群を担当する部に所属する部員にあてはめ、両尺度得点が高い規律育成-H群($N=115$)、部員育成が高い育成-H群($N=121$)、規律指導が高い規律-H群($N=20$)、両尺度が低い規律育成-L群($N=192$)に分類した。

部活動への適応感における連帯性と管理行動スタイルとの関係 部活動への適応感各下位尺度得点を従属変数とした連帯性(2)×管理行動スタイル(4)の二要因分散分析(多重比較はTukeyのHSD法)を行った。

1 部活動への積極的行動 分散分析の結果、連帯性と管理

行動スタイルの両主効果が認められた($F(1, 440)=53.86$, $p<.001$; $F(1, 440)=2.73$, $p<.05$, $MSe=.89$)。多重比較の結果、前者は連帯性H群が連帯性L群より、後者は規律育成-H群が育成-H群および規律育成-L群より有意に高かった。

2 部の雰囲気への満足感 分散分析の結果、連帯性の主効果が認められた($F(1, 440)=123.16$, $p<.001$, $MSe=.70$)。体重比較の結果、連帯性H群が連帯性L群より有意に高かった。

3 部への所属感 分散分析の結果、連帯性の主効果及び連帯性と管理行動スタイルとの交互作用が有意であった($F(1, 440)=44.50$, $p<.001$, 連帯性H群>連帯性L群; $F(1, 440)=3.33$, $p<.05$, $MSe=1.15$)。後者については、単純主効果の検定を行うと、連帯性L群において規律育成-H群が育成-H群より高く($F(1, 440)=3.53$)、連帯性H群では管理行動スタイルによる有意差が認められなかった($F(1, 440)=0.97$)。

考 察

本研究では、全般的に連帯性が高い部に所属する部員の適応感が高い中、連帯性が弱い部において顧問教師の規律指導と育成指導の両者が高い部に所属する部員は、育成指導のみが高い部に比べると、部への所属感が高いことが示唆された。集団では連帯性に関する要因が重要になること、また集団をまとめる上で規律と育成に関する指導が重要であることは、先行研究でも支持されている。本研究では、特に連帯性の弱い部でその違いが認められた。所属感が強くなることは集団凝集性と関連すると予測される。その結果、仲間に認めてもらいたいと意気込むなど、動機づけの向上にもつながるだろう。それゆえ、部員の自主的な活動である部活動においても、顧問教師の適切な指導が前提になることが確認された。

ただし、顧問教師が本来の職責を果たす場合は部活動ではない。部活動のあり方については議論の余地が残されている。それでも、部活動やそれに類する活動が果たす生徒への成果を検証し、活動のあり方を検討する際、指導者に求められる主要な役割に規律指導と育成指導が含まれることが確認された点は意義があると思われる。本研究で示唆された点より、顧問教師の役割をどこまで求めるのか、また制度をどのように改善するのかを考える視点の提供になることを期待したい。

引用文献

- 藤田雅文・松原文和. (1992). 運動部顧問の管理行動に関する研究 体育・スポーツ経営学研究, 9, 1-12.
吉村斉. (2005). 部活動への適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係 教心研, 53, 151-161.
吉村斉. (2016). 中学運動部員の適応感を規定する部の連帯性と顧問教師の規律指導との関係 社心, 146.
吉村斉. (2017). 運動部員の部活動への適応感における部の連帯性と顧問教師の育成指導との関係 教心, 232.